

野菜生産者のための相場研究

今年の市場相場を読む 夏秋野菜

四月、五月は夏秋野菜の育苗から定植が始まる時期である。今年は、どんな品目をどれだけの面積、作付けようかと迷う声も聞かれる。何しろ、平成四年は年間を通じて野菜類は大低迷した。が、昨年は夏秋期から野菜は軒並み高くなった。今年の作付けの目安になる、昨年の市場相場の推移を、どう「読んだらいいのかわかる」。そんな農業経営者の参考にするために、「市場相場を読む」をお届けする。なお、以下は東京市場において、特徴的な相場推移を見せた品目について解説したものである。

流通ジャーナリスト

小林彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。青果物流通情報データベース「チェルシーネット」、青果物流通を軸とする「農経マーケティング・システムズ」を主宰。著書に『ドキュメント青果物市場』『日本を襲う外国青果物』『リポート青果物の市場外流通』などのほか、生産、流通関係誌紙での執筆多数。

ネギ
既存産地の生産意欲高く
新規の生産導入は危険

【概況】
平成四年の秋冬期から始まっていた、入荷増の単価安の推移が平成五年の三月ごろまで続いていたが、それも五月には数量的には平年並みの入荷量に落ちつき、単価も平年並みに戻した。

夏場のネギはもとも需要が少ないために、入荷量の推移は平成五年も平年並みであったが、通常夏場に下がる単価が昨年の場合には六月以降も高く、九月にはいったん下がるが、一〇月以降、入荷量増大傾向にもかかわらず単価は上昇。その後も平成六年の年明けから二月にかけて暴騰の商状となっている。

【背景】
年の前半は千葉、埼玉、茨城などの近県物が中心であり、夏場でも最後の茨城が八月上旬まで、夏ネギは七月ごろから東北、北海道産に切り替わるのが通常のパターンである。夏場は一般需要というよりは業務用需要が中心であり、入荷が少なくなると相場は八ネの例年並み。しかし、相場は入荷量的にはほぼ例年並み。しかし、相場は六、七、八月と数年来の高値となった。これは六月の早い梅雨入りと、続く長雨、

キャベツ
天候が順調に推移すれば
夏場に暴落の可能性も？

【概況】
年明けは愛知、神奈川産の冬キャベツが中心で数量も少なく、四月のピークに向かつて春系キャベツが潤沢な出回りとなるに従い、相場も年明けよりはこなれてくるのが例年のパターン。六月から夏場に向かつては数量はやや落ちながら横ばい推移となっているが、昨年の場合は四月のピークを過ぎてから、八月まで一本調子に入荷数量は減少した。そのため、七、八、九月とキロ二〇〇円前後の高騰となり、その反動のように一〇、一十一月が急落した。

【背景】
年明けは平成四年の秋冬期の相場が低迷したこと、北海道などの貯蔵物も多く、年初めはやや入荷増傾向で始まったが、四月のピークも例年よりは数量が少なく、やや高値基調だった。その後、六月以降の低温、日照不足が主産地の群馬の作柄を悪化させたことに加え、平成四年には春先から安値で推移したことを見て、北海道や長野はレタスへの転換を含めキャベツの作付面積を減らしていたため、夏場は天候不順と作付け減のダブルパンチで入荷減、高騰となった。

ピーマン
面積の急増は起こらず
暴落の危険はない

【概況】
冬場に少なく、春先五月のピークに向けて一気に増えてくるというパターンは、昨年も例年並みであった。ただし単価は例年より二〜三割も安い状態が続いた。ところが六月以降、八月に向けて入荷が急減したのに伴い、単価は急騰して冬の不足時にも匹敵するような高値となる。九月にはやや入荷も増えるがまた年末に向かつて減り出して、単価は高値のまま推移した。

【背景】
ピーマンなどの果菜類は、日照に敏感な品目で、低温であっても日照さえあれば肥大が促進する。年の前半はほぼ順調な天候に恵まれたことから入荷は潤沢であった。が、例年でも梅雨の時期には日照不足で肥大が遅れるため入荷減になるものだが、昨年はそれに長雨などによる近年にない深刻な日照不足が続ぎ、八月には例年の二・五割もの入荷減となった。秋以降も入荷は例年を下回る推移となったため、高値が続ぎ一二月には暮れの需要期に品薄となり高騰した。

この品目は、業務用ももちろんだが一般家庭消費が根強い品目でもある。一般に

ニンジン
昨年の夏需要の高まりは
野菜類高騰のあおり

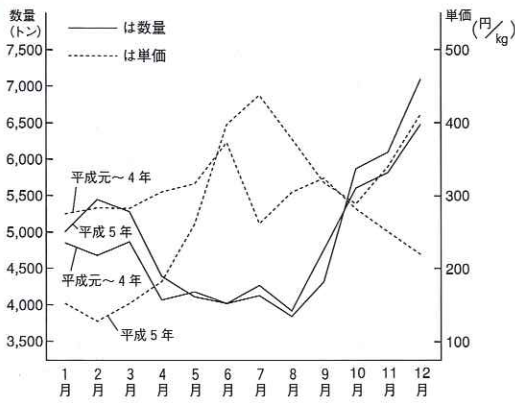
【概況】
平成四年の夏以降、他の野菜類が低迷する中、ニンジンだけは高値が続いたが、一二月には千葉産が本格化すると相場が崩れ、例年に入荷増も手伝って、その相場低迷が昨年の五月ごろまで尾を引いた。例年のパターン同様、五月以降入荷が減少傾向をたどり、七月には年間でも最不需要期となるが、このときの入荷量は例年並みのものであった。しかし、価格は六月に底を打つや七、八月には高騰する。九、一〇月の北海道産のピークに向かう時期は、例年では入荷増と需要増が重なるために、価格はむしろ上昇する時期だが、昨年の場合は七、八月の反動のように暴落商状となり、年末まで低迷した。

【背景】
昨年は、年の前半を引っ張る千葉産などの関東物が例年より一割前後多かったのは、過去数年、年明けの相場が順調だったためである。そのため相場は六月まで低迷した。しかし、六月以降、長雨など冷夏のために、関東物の切り上がりも早く、北海道産が遅れていたことから、八月の旧盆過ぎに北海道産がようやく本格化するまで、とりわけ

低温、日照不足によって東北、北海道産の遅れ、作柄不良となり、関東近県のものも終了まぎわで品質劣化が目立つなど、「業務用ネギ」が不足したことによる。入荷量が例年に比べてそれほど減っていないのは、「高値時には中央に荷物が集中する」ため、不足ぎみの業務用ネギを求めて、地方から中央市場に注文が殺到したことを意味している。

【今年の対応】

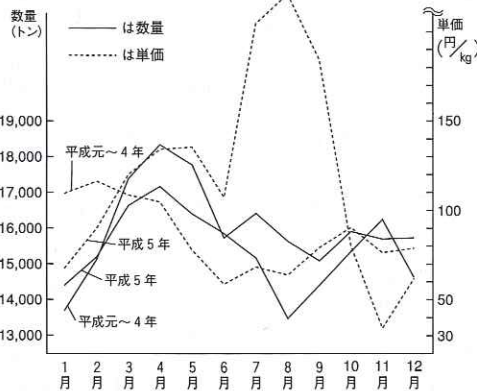
昨年の夏場の高騰は、天候不順のために東北、北海道産が遅れたことが原因である。したがって、今年の夏場の相場は、六月以降の天候の推移によるが、昨年と同様の条件となることはまずないとすると、夏季をめざした新たな生産を導入するのは危険である。今年は年明けから三月中旬まで高値（キロ三〇〇〇円近い相場も）が続いていたことから、既存のネギ産地はほとんど生産意欲が強いはずだ。ネギ（長ネギ）は土地利用型の作目だけに、導入は慎重を期したい。昨年来の高値に危機感を持った加工業者などが、韓国、中国などからの開発輸入を準備する動きもあり、今年はネギに関しては推移を見守るべき年だろう。



八月の入荷が、東京市場全体で例年の一五%減程度にとどまったにもかかわらず、単価が四・五倍にもハネあがったのは、それだけ業務、加工仕向けの基本的な原材料で、過不足が敏感に市況に反映するという品目であるためだが、それだけではない。低温、日照不足が全国的な規模で起こったことから、産地は中央への出荷を優先し、地方需要が中央からの転送でなければ手当てできない、という状況が発生したためである。

【今年の対応】

四〜五年前から、生産者の高齢化、労働力不足を理由にキャベツなどの重量野菜の作付面積の減少が言われてきた。一見、それが遠因となつての数量不足に見えるが、そうではない。長野をはじめ、東北、北海道などでは、夏キャベツにはかなり力を入れて生産が拡大している。ただ、平成四年が周年を通じて余りにも市況低迷状態が続いたことから、若干の面積減を一時的に招いただけで、天候が順調に推移すれば、今年の夏場はおそらく暴落商状もありうる。生産拡大はいいが、業務、加工関係の地域需要をいかに開拓するか、である。

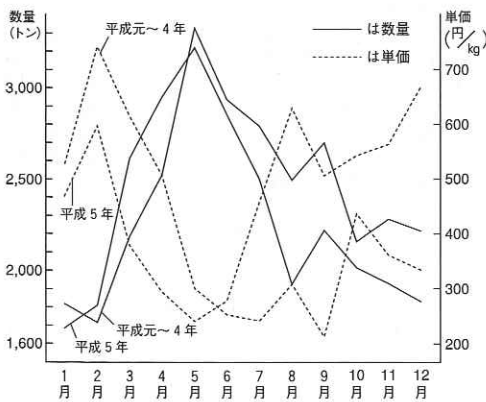


「ピーマン嫌い」は多いが、栄養価を考えて食卓にはよく上る品目である。品薄で高騰しても需要がついてきている、といつていい。

【今年の対応】

状況からすると、昨年のような日照不足がない限り、ことしも不足なく入荷する見通しである。しかし施設栽培が中心である果菜類のなかでもピーマンは、他のナス、トマト、キュウリのように、品目間で生産が簡単に移行できる品目ではない。そのため、昨年の高値に敏感に対応して、面積拡大が急激に起こる可能性は低い。大型のベル型のピーマンについては、昨年の秋以降の高値で今年は出荷が増えてくること予想できるが、まだ大型種は業務用主体だけに、需要に柔軟性がない。その点、通常のピーマンについては、安ければ安いなりに需要の底支えがあるため、夏場に若干の入荷増大があっても暴落することはないと思われる。

ただし、産地包装が主流になっているピーマンも、年間を通じて一〇〇グラム袋入りのみ、というのは、小売店にとって決して売りやすいロットではない。



業務用に耐える品質のものが品薄となり、暴騰。しかし、八月の後半から北海道産が各産地出そろって来たために急落。そして、それが年末まで尾を引く。夏以降の入荷量は、昨年はほぼ例年並みであったにもかかわらず、七、八月急騰、九月以降急落という商状を見せたのは、前段は野菜類がいつせいに暴騰したのに引つ張られたこと、後段は北海道産が例年であれば2L、L中心のもの、昨年はL、M中心と、小玉傾向だったことが原因である。

【今年の対応】

夏場のニンジン、一般家庭にとっては不需要期にあたる。業務用需要が相場を作る時期であり、数量が不足すると高騰するが、逆に多すぎると暴落する時期もある。昨年の場合の高値は、全体に野菜が高騰したために、普段から単価の安定しているパレイシヨ、タマネギ、ニンジンを求める一般家庭需要が強まったためだ。小売店では、これらの土物は年間ほとんど売価を変えないで販売しているため、割安感があつたのだろう。夏場にニンジンの需要があつたのは昨年の特殊事情である。

